



Title	日本語とロシア語における不満表明ストラテジー : 親疎・上下・役割関係を中心にして
Author(s)	プロコピエヴァ, マリア
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 150-159
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69224
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語とロシア語における不満表明ストラテジー —親疎・上下・役割関係を中心にして—

プロコピエヴァ マリア

1. はじめに

不満表明は依頼、謝罪、ほめ、感謝等の言語行動と共に研究の対象とされており、特に、様々な言語を中心にした対照研究が行われている(日英:藤森 1997、日韓:李 2004 等)。Brown & Levinson(1987)によると、不満表明は他の発話行為と異なり、相手のポジティブフェイスを脅かす行為であるという。そのため、相手とのコミュニケーションに摩擦が起こり、対人関係に支障をきたしてしまう可能性もある。特に、異文化間コミュニケーションの場合は言語によって不満表明が異なるため、多種多様な言語の母語話者同士の会話において母語の負の転移などによる不自然な言い方が誤解を招いてしまい、聞き手とのやり取りがスムーズに進まなくなると言える。この特徴は今まで行われてきた多くの先行研究でも言及されている。不満表明のもう一つの特徴として考えられるのがその定義である。Laforest(2002)による“complaint”は依頼や謝罪と異なり、批判、叱責、非難、侮辱など FTA(相手のポジティブフェイスを脅かす行為)を起こす他の発話行為と同様に典型的な形式が特定されておらず“complaint”の定義を論理的に記述することは容易ではないと指摘している。更に、文脈によっては、批判、叱責、非難、侮辱などの発話行為との区別を付けるのも難しいという。本稿では、Olshtain & Weinbach(1993)、Trosborg(1994)、初鹿野他(1996)を参考にして、不満表明を「話し手が当然と考える行動期待、文化及び社会的規範に反する状況への不満を表わす発話行為である。また、話し手が好ましくない行動をした、或いは、好ましくない状況を引き起こした聞き手に責任を負わせるものである」と定義する。

管見の限りでは、日本語とロシア語における不満表明に関する対照研究はまだ行われていない。本研究では、日本語とロシア語の母語話者が不満を表明する際に、どの場面で不満を言うことが多いのか、どのようなストラテジーが多く使用されているか、また、それぞれの特徴という三つの問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1. 調査協力者と調査時期

本研究の調査対象者に関しては、日本語母語話者(以下 JNS)は 10~20 代の大学生及び大学院生で、51 人(女 32 人、男 19 人)で、平均年齢は 21 歳、ロシア語母語話者(以下 RNS)は 10~30 代の大学生、大学院生、社会人合わせて 49 人(女 33 人、男 16 人)で、平均年齢は 23 歳であり、日露合わせて 100 人である。調査対象地域は日本の近畿地方とロシアのシベリアと極東地域である。調査は 2016 年 6 月から同年の 8 月にかけて行った。

2.2. 調査方法

本研究の調査では、データを収集するために、Google フォームというオンラインアンケートの集計システムを採用し、日本語とロシア語による自由記述型の談話完成テスト(以下 DCT)を行った。調査の設定について具体的に述べると、初鹿野他(1996)と李(2004)を参考にし、日本とロシアにおける日常生活で不満が生じる可能性の高いと考えられる六つの場面を使用した。DCT の形式は特定の場面で何か言うか、言わないかという二つの選択肢を設定し、言わない場合は具体的にその理由を回答者に記入してもらった。各場面の具体的な内容は以下の表 1 のとおりである。

表 1 各場面の内容

場面名	場面の内容
場面 1	あなたはチケットを買おうと思い、列に並んでいます。あなたの順番なのに、突然、知らない人が割り込んできました。
場面 2	来週、あなたは期末テストがあるので、図書館で準備しています。しかし、近くに座っている知らない人たちが大きい声でしゃべっています。そのため、なかなか集中できません。
場面 3	大学の授業でグループごとに発表することになりました。共同発表の打ち合わせでクラスメイトが自分の担当した部分をやってきませんでした。
場面 4	一所懸命がんばって、レポートを書いて提出しました。でもあなたの成績は自分が思ったよりかなり低かったです。
場面 5	友達と一緒に映画を見に行く約束をしました。当日、友達が何の連絡もせずに、待ち合わせ時間に 15 分遅刻しました。
場面 6	あなたは友達と一緒に喫茶店に行きました。二人は同じケーキを注文しましたが、ケーキはなかなか来ません。

本調査で設定した上記の場면을対人関係により次の四つのグループに分ける。

1. 「親」の関係による場面: 場面 3「共同作業に非協力的な人」と場面 5「待ち合わせの遅刻」であり、クラスメイト(場面 3)や友達(場面 5)が作業をやってこなかったり、遅刻をしたりするという好ましくない状況を引き起こし、話し手に対して迷惑を掛ける行為を表している。
2. 「疎」の関係による場面: 場面 1「列への割り込み」と場面 2「図書館での騒音」であり、全く知らない相手が社会的なマナーやルールに違反する行為を表している。
3. 役割関係による場面: 場面 6「注文の遅れ」であり、店員と客という役割関係を表している。注文したものが出ないというサービス上の問題による好ましくない状況を表している。
4. 上下関係による場面: 場面 4「低い成績」であり、先生と学生という上下関係を表している。この場面では、学生が低い成績に納得がいかない状況を表している。

2.3. 本研究の不満表明ストラテジーの分類について

不満表明ストラテジーの種類はある言語の特徴、またそれぞれの場面の内容によって異なり、普遍的な不満表明ストラテジーの分類方法を決定するのは容易ではないと考えられる。本研究では、Olshtain & Weinbach (1993)、初鹿野他 (1996) において用いられている不満表明のストラテジーの分類を参考にし、今回の調査で得られた日本語とロシア語のデータに現れたストラテジーを加えて、不満表明のストラテジーを「Ⅰ. 直接的な不満表明のストラテジー」、「Ⅱ. 間接的な不満表明のストラテジー」、「Ⅲ. 人間関係修復のストラテジー」の三つのグループに分けた。

「Ⅰ. 直接的な不満表明ストラテジー」: 話し手が好ましくない状況だと思い、不満を感じた際に、聞き手に対して自分の否定的な感情を明示的に表すストラテジー。

「Ⅱ. 間接的な不満表明ストラテジー」: 不満を感じても、自分の不満をより暗示的に表すストラテジー。

「Ⅲ. 人間関係修復のストラテジー」: データに現れた不満表明以外の相手への配慮を示すストラテジー。

不満表明は元々、話し手と聞き手の人間関係を壊す可能性の高い発話行為であり、本研究の調査のデータから、不満表明によって人間関係に与えられるネガティブな影響を避け、人間関係を維持するために、「Ⅱ. 間接的な不満表明ストラテジー」を使うか、或いは、「Ⅰ. 直接的な不満表明ストラテジー」の使用と同時に、人間関係修復のストラテジーが使用される傾向が見られた。以下の表2は各グループにおけるストラテジーの種類と実例を示している(例文中の太字が各ストラテジーに該当する部分である。ロシア語の例については、日本語訳を付けた)。

表2 不満表明のストラテジーの分類

Ⅰ. 直接的な不満表明ストラテジー	
a. 改善要求(相手が起こした好ましくない状況を直接的に指摘しその改善を求める)	「 きちんと列に並んでももらえますか 」 (場面 1)
b. 次回の行動の改善要求(相手が起こした好ましくない状況を次の機会でも繰り返さないように要求する)	«В следующий раз подготовься» (訳: 次回は準備してきてね) (場面 3)
c. 非難(相手、或いは、相手が起こした好ましくない状況を直接的に責める)	«Извините, вы нагледете » (訳: すみません、 図々しいですよ) (場面 1)
d. 警告(好ましくない状況を起こした相手を脅す)	「 次までにやっこなかつたらグループから外すから 」 (場面 3)
Ⅱ. 間接的な不満表明ストラテジー	
a. 好ましくない状況への言及(相手が生じさせた好ましくない状況について、遠回しに述べたり、指	«Мы первыми заняли это место» (訳: 私たちが先に並んでいました) (場面 1)

摘したりすることにより、相手にその状況を認識させる)	
b. 理由を尋ねること(好ましくない状況を発生させた相手に対してその原因、理由、事情を問いたす)	「評価が低かったのは何故でしょうか。どこが問題だったのでしょうか」(場面 4)
c. 代償要求(好ましくない状況を起こした相手に代償を求める)	「ジュースおごりな」(場面 5)
d. 皮肉(皮肉を言うことで相手に自分が起こした好ましくない状況を認識させる)	«Ну, привет»(訳:早いね)(場面 3)
e. 確認(好ましくない状況の原因・中心となっている相手に対し、その状況が相手の意図や行為によって発生したものかを確認の形を取って尋ね、自覚を促す)	「ケーキ注文したんですけど、注文通ってますか？」(場面 6)
f. 社会的規範・マナーへの言及(相手が起こした好ましくない状況が社会的に許されないことを指摘し認識させる)	「やってくる約束やったやんー、忙しかったりした？」(場面 3)
III. 人間関係修復のストラテジー	
a. 相手への気遣い(相手に対する思いやりを表す)	「なんかあったの？心配したよ」(場面 5)
b. 気にしていないこと(相手の起こした好ましくない行動などをこの場面に限って許容する)	「遅刻やぞ！別にいいけど」(場面 5)
c. 助言要求(相手にアドバイス、意見を求める)	«Извините, но в чем я допустил ошибку, пожалуйста, объясните, чтобы в следующий раз я смог лучше подготовиться»(訳:すみませんが、次回は、もっとよいレポートを書くために、どこが間違っていたのかを教えていただけませんか)(場面 4)

3. 結果と考察

3.1. 不満表明出現の有無の全体的な傾向

まず、言語ごとに六つの場面において不満を言うか言わないかという全体的な傾向を見た上で、場面の四つのグループ別に、不満表明ストラテジーの使用率、各言語の特徴及び相違点を考察する。

表3 各場面における不満表明出現の有無の割合

	日本語	ロシア語
場面1	60.8% (31)	91.8% (45)
場面2	7.8% (4)	75.5% (37)
場面3	84.3% (43)	69.4% (34)
場面4	14.3% (7)	73.5% (36)
場面5	84.3% (43)	51.0% (25)
場面6	74.5% (38)	65.3% (32)
平均	54.3% (27.6)	71.1% (34.8)

上記の表3は実際に各場面で何かを発話するとして調査協力者の人数を調査協力者全体の数で割ったものを百分率で表し、括弧内に人数の実数を示している。その結果、全体的にRNS(71.1%)はJNS(54.3%)より不満を表明することが多いが、個々の場面によって不満表明の出現には差があることが分かった。具体的に言うと、場面2「図書館での騒音」(JNS:7.8%、RNS:75.5%)と場面4「低い成績」(JNS:14.3%、RNS:73.5%)では、JNSがRNSと比較すると不満を表明する割合が低く、大きな差が見られた。それに対して、他の場面1、3、5、6にはJNSとRNSの間に大きな差が見られなかった。そのため、不満表明戦略の使用に関して分析を行う際に、不満表明の出現有無の差、また不満表明戦略の多様性にも影響が与えられることを考慮する必要がある。

次節では、六つの場面を四つのグループに分け、各グループで使われた不満表明戦略とその実例を具体的に考察する。

3.2. 「疎」の相手に対する不満表明の場面(場面1と2)

まず、各場面における不満表明戦略の割合の計算方法について説明したい。場面ごとに何かを言う場合、産出された発話が一つの不満表明戦略だけではなく、幾つかの不満表明戦略によって成り立つことがあるため、一つの場面で用いられた各不満表明戦略を同じ場面で使われた不満表明戦略の総使用数で割っている。そのため、表3で表示した不満表明出現の有無とは計算方法が異なる。

「疎」の関係による場面1「列への割り込み」(91.8%)と場面2「図書館での騒音」(75.5%)では、ロシア語はどちらの場面でも不満を表明することが多い(表3)。ところが、日本語は場面1だけ(60.8%)不満が表明しやすく、場面2(7.8%)は不満が表明しにくい傾向が見られた(表3)。

次に、この二つの場面ではどの戦略が多く使われたかについて述べる。場面1は日露ともに【I a. 改善要求】(JNS:36%、RNS:28%)と【II a. 好ましくない状況への言及】(JNS:50%、RNS:36%)が多用された。また、ロシア語で日本語と異なり、【II f. 社会的規範・マナーへの言及】も使われた。

表 4 不満表明ストラテジーの全体的な使用率(場面 1、2) (括弧は使用数)

ストラテジー名	場面1「列への割り込み」		場面2「図書館での騒音」	
	JNS	RNS	JNS	RNS
I 直接的な不満表明ストラテジー				
a. 改善要求	36%(13)	28%(14)	100%(4)	63%(31)
b. 次回の行動の改善要求	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
c. 非難	0%(0)	2%(1)	0%(0)	18%(9)
d. 警告	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
II 間接的な不満表明ストラテジー				
a. 好ましくない状況への言及	50%(18)	36%(18)	0%(0)	0%(0)
b. 理由を尋ねること	0%(0)	4%(2)	0%(0)	0%(0)
c. 代償要求	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
d. 皮肉	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
e. 確認	0%(0)	10%(5)	0%(0)	0%(0)
f. 社会的規範・マナーへの言及	14%(5)	20%(10)	0%(0)	19%(9)
III 人間関係修復のストラテジー				
a. 相手への気遣い	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
b. 気にしていないこと	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
c. 助言要求	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)
合計	100%(36)	100%(50)	100%(4)	100%(49)

例 1【I a. 改善要求】(以下の下線部分はストラテジーの具体例を示している)

ロシア語: Встаньте, пожалуйста, в очередь (列に並んで下さい)

日本語: ごめんなさい、順番守ってください

例 2【II f. 社会的規範・マナーへの言及】

ロシア語: Здесь очередь, идите в конец (ここは列です、列に並んでください)

日本語: どいて下さい、みんな並んでいます

場面 2 においては、多くの JNS は不満を言わないということが分かった。日本語で使われたストラテジーが【I a. 改善要求】のみである。それに対し、ロシア語の場合は、【I a. 改善要求】の使用率が最も高く(63%)、その他に、【II f. 社会的規範・マナーへの言及】と【I c. 非難】も使われた。

例 3【I a. 改善要求】

日本語: あの一、すみませんが少しでも静かにしてもらえませんか。

ロシア語: Извините, вы не могли бы разговаривать потише (すみません、小さい声で話してもらえますか)

例 4【I c. 非難】

ロシア語: Извините, но в библиотеке занимаются люди, и вы нам мешаете (すみません、図書館でみんなが勉強しています、あなたたちは迷惑です)

場面 1 と 2 は改善の可能な場面であるため、両言語では、【I a. 改善要求】が多用されたと考えられる。さらに、列への割り込みと図書館での騒音は社会的なマナーに違反する行為なので、ロシア語では、【II f. 社会的規範・マナーへの言及】も使用されていた。但し、RNS は「Разговаривайте потише, вы же в библиотеке (小さい声で話してください、あなたたちは図書館

にいますから」、「Извините, здесь очередь, мы последние(すみません、ここは列です、ここは私たちが並んでいます)」のように図書館や列のことを主張し、社会的なルールの違反による好ましくない状況を相手に気づかせる。更に、日本語と異なり、ロシア語においては、【I c. 非難】という戦略も用いられ、場面 1「列への割り込み」では、「Извините, вы нагледете(すみません、図々しいですよ」のように割り込んできた相手を責める例が 1 例見られた。また、場面 2「図書館での騒音」は【I c. 非難】の例が場面 1 より多く、9 例あり、「Извините, потихе говорите, Вы мешаете другим(すみません、小さい声で話してください。周りの人に迷惑だから)のように図書館でしゃべっていることで周りの人に迷惑を掛けているとはっきり語ること特徴的であると考え

3.3. 「親」の相手に対する不満表明の場面(場面 3 と 5)

次に、「親」の関係による場面 3「共同作業に非協力的な人」と場面 5「待ち合わせの遅刻」で使われている不満表明戦略の全体的な使用率を考察する。3.1.「不満表明出現の有無の全体的な傾向」にある表 3 を見ると、場面 3「共同作業に非協力的な人」(JNS:84.3%、RNS:69.4%)と場面 5「待ち合わせの遅刻」(JNS:84.3%、RNS:51.0%)は、日露ともに不満を表明するという回答が 50%以上を占めているが、日本語のほうがやや高い表明率を示している。

表 5 不満表明戦略の全体的な使用率(場面 3、5)(括弧は使用数)

戦略名	場面3「共同作業に非協力的な人」		場面5「待ち合わせの遅刻」	
	JNS	RNS	JNS	RNS
I 直接的な不満表明戦略				
a. 改善要求	28% (13)	11% (3)	0% (0)	0% (0)
b. 次回の行動の改善要求	4% (2)	4% (1)	0% (0)	13% (3)
c. 非難	11% (5)	25% (7)	26% (14)	17% (4)
d. 警告	2% (1)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
II 間接的な不満表明戦略				
a. 好ましくない状況への言及	5% (2)	0% (0)	8% (4)	8% (2)
b. 理由を尋ねること	33% (15)	43% (12)	43% (23)	50% (12)
c. 代償要求	0% (0)	3% (1)	4% (2)	0% (0)
d. 皮肉	0% (0)	0% (0)	0% (0)	8% (2)
e. 確認	4% (2)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
f. 社会的規範・マナーへの言及	13% (6)	7% (2)	0% (0)	0% (0)
III 人間関係修復の戦略				
a. 相手への気遣い	0% (0)	0% (0)	17% (9)	0% (0)
b. 気にしていないこと	0% (0)	7% (2)	2% (1)	4% (1)
c. 助言要求	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
合計	100%(46)	100%(28)	100% (53)	100%(24)

上記の表 5 に示すように、両言語では、上記の場面 1 と 2 と異なり、「III. 人間関係修復の戦略」が使われる特徴が見られた。場面 3 で多用された戦略について述べると、日本語は主に、【II b. 理由を尋ねること】(33%)と【I a. 改善要求】(28%)が使われている。ロシア語は日本語と同様に、【II b. 理由を尋ねること】の使用が多く(43%)、また、【I c. 非難】(25%)も用いられている。

例 5【I a. 改善要求】 日本語: 今からやって!

例 6【I c. 非難】 ロシア語: Подводишь всю группу, как теперь мы будем выступать! (私たちのグループを困らせるよ、どうやって私たちは発表するの)

場面 5 では、JNS と RNS は【II b. 理由を尋ねること】(JNS:43%、RNS:50%)と【I c. 非難】(JNS:26%、RNS:17%)を多く用いていることが分かったが、日本語はロシア語より【I c. 非難】の使用数が多い(JNS:14、RNS:4)。ただし、JNS は RNS と異なり【III. 人間関係修復の戦略】の【III a. 相手への気遣い】も使用している(17%)。

例 7【III a. 相手への気遣い】 日本語: なんかあったの? 心配したよ

例 8【I c. 非難】 日本語: 遅い。連絡してよ

このように、両言語は遅刻や非協力によって好ましくない状況を起こした親しい相手に対して、「なんで遅れたん?」、「Ты почему ничего не подготовил? (あなたは どうして何も準備してこなかった?)」の例のように、なぜ遅れたか、なぜ作業をやってこなかったか、その理由をたずねる傾向が見られた。

また、両言語には次のような相違点が表れたと考える。JNS は場面 1、2 において知らない相手に対して不満を表明しない、或いは暗示的に発言するという傾向が見られたが、親しい相手の場合、不満を言うことが多く、更に、より明示的な不満が表明されやすいという差異が特徴的である。一方、RNS は知らない相手にも、知っている相手にも不満を表明することが多く、また、JNS と異なり、不満を表すことが親疎関係によって左右されず、被害の程度によって左右されると考える。その理由に関しては、RNS は、特に列への割り込みや図書館での騒音のような社会的に受け入れられない行動の場合、親疎関係を問わず、相手に不満を明示的、また暗示的に表明するためであると考えられる。

3.4. 上下関係と役割関係にある相手に対する不満表明の場面(場面 4 と 6)

続いて、表 6 は上下関係による場面 4「低い成績」と役割関係による場面 6「注文の遅れ」において用いられている不満表明戦略を表示している。場面 4「低い成績」における結果を見ると、JNS は不満を言うことが圧倒的に少なく、不満を言う回答者が 7 人だけである。これは日本社会において上下関係が厳しく守られている影響で目上の人である先生に対する不満表明が難しいことが原因の一つである可能性が考えられる。その結果 RNS は同じ場面 4 では、不満を表明することが多いが、表 6 を見れば、「II. 間接的な不満表明戦略」と「III. 人間関係修復の戦略」だけ使用され、不満は間接的に表明されていることが分かった。具体的に述べると、【II b. 理由を尋ねること】(49%)と【III c. 助言要求】(51%)の使用の割合が多く、RNS は先生に付けられた低い成績に関してその理由を聞き、更に、自分が書いたレポートの間違い、欠点などについて具体的にたずねつつ、先生の意見、アドバイスを積極的に求める傾向がうかがえた。

例 9【II b. 理由を尋ねること】

ロシア語: Мне бы хотелось узнать, в чем мои ошибки, из-за которых я не получила

высокую оценку? Что нужно исправить для того, чтобы получить больше баллов? (成績が低くなった理由、間違いなどについて教えていただけませんか。成績をよくするためにどこを修正すればいいですか)

例 10【Ⅲc. 助言要求】

ロシア語: Мне очень важно Ваше мнение по докладу, и хотелось бы услышать от Вас замечания и предложения для последующей доработки доклада (私にとって先生のご意見は非常に大事です。今度はいいいレポートを書けるように、先生から指摘、アドバイスをいただけませんか)

表 6 不満表明ストラテジーの全体的な使用率(場面 4、6) (括弧は使用数)

ストラテジー名	場面4「低い成績」		場面6「注文の遅れ」	
	JNS	RNS	JNS	RNS
I 直接的な不満表明ストラテジー				
a. 改善要求	0% (0)	0% (0)	2% (1)	3% (1)
b. 次回の行動の改善要求	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
c. 非難	0% (0)	0% (0)	0% (0)	6% (2)
d. 警告	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
II 間接的な不満表明ストラテジー				
a. 好ましくない状況への言及	0% (0)	0% (0)	54% (26)	16% (5)
b. 理由を尋ねること	57% (3)	49% (17)	0% (0)	16% (5)
c. 代償要求	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
d. 皮肉	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
e. 確認	0% (0)	0% (0)	44% (21)	59% (19)
f. 社会的規範・マナーへの言及	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
Ⅲ 人間関係修復のストラテジー				
a. 相手への気遣い	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
b. 気にしていないこと	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
c. 助言要求	43% (4)	51% (18)	0% (0)	0% (0)
合計	100% (7)	100% (35)	100% (48)	100% (32)

場面6「注文の遅れ」の場合は、日本語は主に、【Ⅱ a. 好ましくない状況への言及】(54%)と【Ⅱ g. 確認】(44%)が多く使われている。ロシア語は【Ⅱ g. 確認】の使用率が高く(59%)、また日本語で見られなかった【Ⅰ c. 非難】と【Ⅱ b. 理由を尋ねること】も用いられている。RNSもJNSも注文が遅い時、「Скажите, пожалуйста, как долго еще ждать мой заказ? (あとどれくらい待てばいいですか)」、「すいません、ケーキ頼んだんですけど、オーダー通ってますか」の例のように、注文がちゃんと通っているのか、時間がどれくらいかかりそうなのかについて確認することが多い。また、RNSはJNSと異なり、「В чем дело, почему наш заказ задерживается? Вы должны были нас об этом предупредить! (注文が遅くなるなんてどうしてですか? 早めに言ってくるべきだろう)」のように、注文が遅れる理由について聞きながら、遅れるのであれば客に早めに知らせるように強調し非難する回答者もあったが、このような発話の使用数が少なかった。

4. おわりに

本研究では、日本語とロシア語における不満表明ストラテジーを対照した。その結果は以下のようにまとめられる。

- 1) 日本語の場合は不満を表明するかどうかが親疎関係及び上下関係によって大きく左右されるが、ロシア語の場合は、親しい相手にも知らない相手にも不満を表すことが多く、不満表明は、各場面で生じた好ましくない状況、自分が受ける不利益、被害の程度によって変わると考えられる。
- 2) JNS は親しい相手に対して「Ⅰ. 直接的不満表明ストラテジー」と「Ⅱ. 間接的不満表明ストラテジー」の両方を使っているが、知らない相手に対しては不満を表明しないか、不満をより暗示的に表す傾向が見られた。それに対し、RNS は親疎関係を問わず、知らない相手に対しても自分の不満を直接的に表明することが分かった。

今回の調査では、データ収集の際に談話完成テストを使用しているが、場面数(六場面)や調査協力者数(JNS51人とRNS49人)が限られており、調査結果には限界があると考えられる。本稿ではあくまでも今回の調査における不満表明ストラテジーの使用結果の傾向性を示しており、今後さらなる研究の積み重ねのもとに、両言語におけるストラテジーの分類を再考する必要があると考えられる。

今後は、談話完成テストの他に、ロールプレイ、また、日常的な会話に現れる不満表明の収集といった調査方法を工夫し、より自然なデータを増やしてこの考察を続けていきたい。

参考文献

- 李善姫(2004)「韓国人日本語学習者の『不満表明』について」『日本語教育』、第123号、日本語教育学会、pp. 27-36
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88 日本語教育学会、pp. 128-139
- 藤森弘子(1997)「不満表明ストラテジーの日英比較—談話完成テスト法の調査結果をもとに—」『言語と文化の対話』、英宝社、pp.243-257
- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press
- Laforest, M. (2002) Scenes of family life: complaining in everyday conversation. *Journal of Pragmatics* 34, 1595-1620, Elsevier Science B.V
- Olshtain, E. & Weinbach, L. (1993) Interlanguage Features of the Speech Act of Complaining. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage Pragmatics* (pp. 108-122). New York, Oxford : Oxford University Press
- Trosborg, A. (1994) *Interlanguage Pragmatics: Requests, Complaints, and Apologies*. Berlin: Mouton de Gruyter